

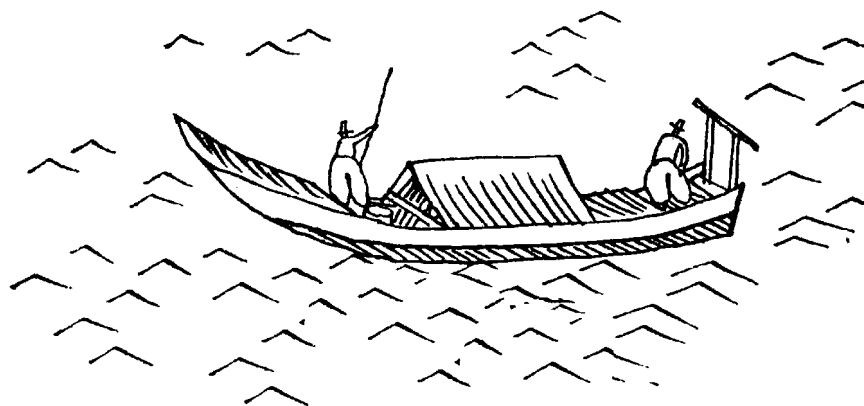
故郷忘じがたく候

司馬遼太郎



じがたく候

司馬遼太郎



文藝春秋刊

故郷忘じがたく候

昭和四十三年十月一日 第一刷
昭和五十四年八月十日 第十四刷

定価 八三〇円

著者 司馬 遼太郎
し ば りょうたろう

発行者 榎 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3
電話東京(265) 1111 (代表)
郵便番号 1011

万一乱丁・落丁のものはお取替えいたします

印刷・凸版印刷株式会社 製本・矢嶋製本

©1968 RYOTARO SHIBA Printed in Japan

目次

故郷忘じがたく候 三

斬殺 七一

胡桃に酒 一四九

裝
幀
風
間
完

故郷忘^{ぼう}じがたく候

一

雨が壺を濡らしている。壺は、庫裡くらのすみにころがっている。
「朝鮮ではないか」

と、U氏は縁から降りて、壺をおこそうとした。が、起きなかった。てのひら二枚ほどの破片が、濡れた地面にかぶさっていたにすぎない。

西陣のあたりの町寺で、住持は本山の役員をしており、そういう関係でわれわれは知りあった。寺の住助わびすけが咲いたからというので、住持は私を茶によんでくれた。この昭和二十三年ごろ、私は新聞社の京都支局に籍があつて、寺院をうけもたされていた。この日の相客はたしかUと言ひ、住持の知人で、私の記憶では骨董商こつどうしょうと紹介されたような気がするが、しかし背の六尺も

あったような巨漢^{きよかん}で、伊勢あたりの大工の棟梁^{どうりょう}のような口のきき方をしていたから、そういう玄人ではなかったかもしれない。こら李朝の初期やな、と雨のなかでいった。

破片には、白い釉薬^{うわぐすり}のうえに鉄砂の絵があらわれている。くるりと一重^{ひとえ}の渦を描いただけの投げやりな絵で、このなんともいえぬ物憂さが朝鮮や、と、U氏は言いかさねた。住持は相手にもならず、黙殺^{もくしかつ}していた。こんな町寺にそういたいようなものがあるはずがないであろう。住持のそういう態度にU氏は動揺^{どうご}したらしく、

「いや、薩摩かな」

と、急にことばをかえた。素人目にもその破片は磁器ではなくあつぽったい陶器であった。まぎれもなく薩摩や、といった。そのとき住持の唇^{くちびる}がはじめてうごいて、

——かもしれまへんな。

という。この寺には豊臣のころ薩摩島津家の一門の者で太閤の怒りに触れ、自裁させられた者の首塚があり、島津家では徳川期を通じてその供養料^{くようりょう}を寺に送ってきていた。そういうつながりのあるところから推せば寺に薩摩焼の壺の破片ぐらいあったところで、「べつに奇態ではおへんな」と住持は興無げにいった。U氏はよろこんだ。

「中^{あた}ったな」

と、住持に自分の目を誇った。U氏にいわせればこの陶片はおそらく薩摩焼のなかでも苗代^{なえしろ}

川の窯かまであろう、苗代川なればこそあたしは朝鮮と見まごうたし、まちごうても恥ではない、
「苗代川の尊さは、あの村には古朝鮮人が徳川期にも生きていたし、いまなお生きている」と
いった。

二十年経った。

そのあいだに住持も死んだし、U氏の消息にいたってはこの寺で出遭であったきりになっている。
ただこのときのU氏の話だけが、私の記憶にかすかながらも残った。それがたまたまよみがえ
ったのは、二十年後のこの春のことであった。私はその日、鹿兒島の宿にいた。

予約している飛行機の出発時刻までに四時間のゆとりがあり、その時間内にどこか、この県
下の、それでもできれば薩摩の古い風土を感じさせる町か村を一カ所見たいとおもい、町で買っ
た地図をひろげてみた。薩摩半島が南にのびて錦江湾をかこんでいる。その半島の錦江湾海岸
に鹿兒島市があり、目を東へ横切らせて東シナ海に出ると、そこに漁港串木野があり、その串
木野の手前の丘陵地帯のあたりを地図でながめているうちに、なんと「苗代川なましろ」という地名が
小さく印刷されているのを発見した。声をあげたいほどの驚きをおぼえた。地名なのか。

私は、焼物の種類名であるとばかりおもっていた。この県での私の知人が、私の質問に答え
てくれた。

「小さな、戸数七十軒ばかりの部落ですよ」

いまは村名が變つて美山みやまというのだ、と知人はつけ加えた。

私は、出かけた。途中十二三キロほどは甲突川こうつがわを上流にむかつてさかのぼることになり、のぼるにつれて孟宗もうそうの藪が多くなつた。最後に低い峠を越えた。車が前へ傾き、しずかにくだりはじめたとき前方にひろがりはじめた風景というのは、これをどう形容すればよいであろう。丘陵は低く、天がひろく、その下に海を隠しているらしく地物は海照りであかるかった。道が白い火山灰のせいか晒さらしたように白く、どの樹の緑もわざとらしいほどに淡い。朝鮮の山河であつた。似ているでしょう、と同乗してくれている知人もいった。

——村そのものがすでに名品である。

と、かつてここを訪ねた高名な陶芸家がいったという。家々の垣根は、晒し色の道路の両側につづいている。薩摩特有の青味がかった石で垣が組まれ、その上には練塀ねりべいはいっさい用いられず、すべて植物が植わっていた。生垣はキンチクとよばれる矢竹のような細竹か、それとも犬楨いぬまさであり、これがこの隠し里とでもいいたい村の風景に軽味をあたえていた。そこに武家門がある。

「沈寿官」

と標札があがっている。鹿児島旧士族沈寿官家はその韓国ふうの姓名が世襲であり、戸籍名であり、むろんいまの第十四代目の当主もその名なのである。村には沈氏のほかに朴氏があり、

金氏がある。さらに鄭氏があり、李氏があり、それにつけてもこの村びとの驚嘆すべき頑固さは、三百七十年前に朝鮮南原城^{ナムオン}でとらえられ、拉致^{うち}され、ついにはこの薩摩につれて来られて帰化せしめられて以来、江戸時代からこんにちにいたるまでついにその姓名を変えようとしていないことであつた。明治後、多少の例外もできた。村のなかでも名家とされる朴氏は東郷という日本姓に変え、その朴家から大日本帝国最後の外務大臣である東郷茂徳が出た。私がこの村に入ったとき、背後の草むらに子供の声が湧き、ふりむくと道路わきの段畠^{ダンハシ}のかけから小学生が二十人ばかり出てきた。その畠のわきに木製の標語の杭^{くわ}が立っている。杭には登校する生徒にめだつような大きな大きな文字で、

「うそを言うな。負けるな。弱い者をいじめるな。東郷先輩につづけ、美山の子」

と書かれていた。この東郷というのは薩摩のことだから当然東郷平八郎のことであろうとおもつたが、思いちがひであつた。

「朴家の東郷さんことです」

と、あとで教えられた。

私は、沈家の門をくぐった。門をくぐって数歩ゆくとそこに小さな石塁^{いすらい}がある——いまは沈家にもないが——この石塁が薩摩の武家屋敷の一特徴で、外敵が門を突きくずして攻めこんできたばあいいま一度この石塁をたてに防ぐ、といわれている。入って右手に樹齡のわかい桜が

花をつけており、その下の鳥小屋で尾羽のうつくしい薩摩鶏が飼われていた。左手に小門があり、入ると中庭である。そこに臥竜梅がりようばいが池を這っている。私はかつて、こまっとんやしきといまでもよばれている旧薩摩藩家老小松帶刀の邸趾をたずねたとき、そこでも蒼古とした臥竜梅をみた記憶があるが、薩摩の武家屋敷ではこういう梅が好まれていたのかもしれない。玄関はなく、客はこの中庭の沓脱石くまげいしからいきなり縁にあらがってゆく。座敷は中庭に面して大きく開口しており、十四代沈寿官氏が近眼鏡をかけて縁にすわり、大きな体をゆすって機嫌よく迎えてくれた。その老熟した作品から想像していたよりもはるかに若く、あとできいたところでは昭和二年うまれということであった。薩摩人は客のために笑顔を吝わづまないといわれているが、沈寿官氏はその点、いかにも隼人ふうであり、座蒲団をすすめ、膝をゆるめることをすすめ、夫人を督励とくれいして茶をすすめ、さらに焼酎をすすめた。座談がとぎれても笑顔を遏やめず、とぎれるごとに話の継ぎ穂をさがすために大きな体を立ちあがらせては、部屋のすみから古い陶器をもってきて私にみせてくれた。おどろいたことに初代沈寿官の作品までが、部屋のすみに、ごく日常的な気楽さでころがっていることであった。

私はそれらを拝見しながら、右の古い記憶を語ってみた。

「ほう」

と、沈氏は儀礼的に歎声を洩らし、聴き入るようなふぜいをみせてくれたが、しかしちよっ

とこまった表情で、そい^いは破片でじゃったですか、と薩摩弁できいた。私はその破片の形状色合いなどを説明したが、なにぶん二十年前の記憶であるために話せば話すほどとりとめがなくなってきた。

Uというあの日の相客についても、あらためてかれの様子を語るとなるとひどくあいまいになってきて、かれが骨董商であつたならばその目はまだ信憑性^{しんひやうせい}があるとしても、どうやらただの大工さんにすぎなかつたような氣もしてきた。そういえばあの寺は裏で普請^{ふしん}をしていたようでもあつた。

沈寿官氏は、笑いだした。

私も仕方がなく笑つた。話はそれきりになり、私はもうそれだけで辞し去るべきであつたが、遊び心地のいい家に連れてゆかれたこどもが一刻でも居ることをひきのばしたがるような心境で、別なことをきいた。

朝鮮のことであつた。どの程度この村には三世紀半前の朝鮮が残っているのであろう。

——まあ、ことばが。

と、沈氏はいった。明治までは一村ごとく韓語^{かんご}で語り、薩摩藩の公式の韓語通辞もこの村から出るようになっていたという。しかし維新後はオノリソといわれる祭祀の歌謡や窯仕事にともなう技術語だけに韓語が残つた。

「アンズルトン」

と、沈氏は突如いった。窯場でつかう腰かけのことを、古い韓国語ではそういうらしい。窯に投げ入れる乾いた木ぎれはチクスンであり、棒はチレであり、水入れはブルサクであり、たききのときにつかう道具はシュレであり、へらはビーコセであり、窯場の空いた地面——焼きあがりのものを置けるような——はバタであり、土のかたまりはトングレであり、ひとたび窯場に入れば陶匠も工人もそれらの韓語でたがいに叫び合い、このことばを用いることなしに工人は他の工人にいかなる所作も命ずることはできない。沈氏は、一昨年韓国にまねかれた。このとき韓国のある窯に行つて仕事をしてみせたとき、ごく自然にこれらの言葉が出た。いそいで薪を投げ入れねばならぬときに、チクスンになに、と叫ぶと、韓人の工人たちは響きに応ずるようになつてその動作をし、そのあと茶をのみながら、

「サラムン チェ ビッチュルル タルンダ（人は自分の血すじに従う）」

と、現場の韓人たちは笑つた。残念ながらそういう現代朝鮮語は沈氏には通じなかった。

陽が、傾いてきた。

私は沈氏の時間をながくとりすぎたことに気づき、あわてて馬上杯を置き、座蒲団を折つて縁をすべり降りた。沈氏も立ちあがつて門まで送つて出てくれたが、ふと指をあげて村の或る方角をさした。

「あの丘に、檀君^{だんくん}をおまつりしてあります」

檀君^{だんくん}というのは、「三国遺事」に、「乃^な往^{わう}二千載、檀君王儉あり、都を阿斯達に立て、国をひらきて朝鮮と号す」とあるように朝鮮開国の神祖である。神話では三千人をひきいて大白山の山頂に降臨したというが、この神を日本列島に棲^すむわれわれの場合でいえばあまてらすおみかみに相当するであろう。苗代川の村では村の鎮守^{ちんじゆ}を玉山宮^{ぎよんぐん}と言ひ、村を創めていらひこの檀君を祭神としてきた。蕃神を日本の神としては認められぬという明治初年の神祇院の態度に一時は村中が当惑したが、そこは薩摩閥をうごかして陳情し、とにかくも公認の——村社——神社になった。

——その鎮守^{ちんじゆ}には、韓語の祝詞^{むく}ものこっちりますし、祭事の仕方、祭具などすべてが古朝鮮の風ごわす。

と、沈氏はいった。

私は、車に乗った。峠にむかつて動きだした。私は鹿児島発最初の飛行便^{ひこうびん}に間に合わなければならなかったが、どうしてもこの村を離れたくないという衝動をおさえきれなかった。うろたえたように運転手の肩をたたき、車をとめてもらった。ドアをあけてうしろを見ると、沈氏の影がまだ立っていた。二十米ばかりを走って沈氏のそばに戻った。沈氏はおどろいたふうであつたが、しかし言葉には出さず、同じ微笑で私を迎え入れてくれた。

「いまの玉山宮、どの山でしょう」

と、私は、自分の輕忽^{けいこ}さを恥じつつも、とにかくもその玉山宮の容姿だけでも目にとどめておきたいとおもった。が、闇はいよいよ濃くなっており、串木野のあたりに残照があるほかは、かろうじて道路むこうの榎の枝の繁みが風の音を立てていることがわかる程度であった。沈氏は「あの星の」と、星で方角を示そうとしたが、しかしむりであった。この暮れの早さが自分のせいであるように、良か嫁^{よめ}どんがごと顔ば隠^もし申したなあ、と小声でいった。このあたりは、沈寿官氏の風^{ふう}半^{はん}のどこからみても冗談^{ちやん}のすきな薩摩人^{さま}でしかなかった。

その後、日が経つにつれて私の腦裏に沈寿官氏と苗代川の一種神寂^{しき}びた村のたたずまいと、それにまだ見ぬ韓神玉山宮のことなどがひろがりはじめ、それが日ごとに幻灯^{こうとう}のように動き、どうにも日常の仕事にさしかえるようになってしまった。このことをまがりなりにも整理するには小説に書いてしずめてしまうよりほかはないが、しかしいま小説に書くには氣持の醇熟^{じゅんじやく}が足らず、氣持のなから沸き立ってくるあわつぶがすこし多すぎるようにもおもわれる。以下、なにをどこから書くべきであろう。

二

唐突だが、天明のころの医家で、橘^{たちばな}南谿^{なんけい}というひとがある。伊勢国^{いせ}久居^{ひき}に藤堂家の支藩があ